

千里第二小学校への想いと感謝

元千二小教諭 柳生 力

戦争が終わって間もない昭和二十二年頃から、ニヒリズムにとりつかれ生きることの意義や目的、学ぶことの意味を見だそうと問い続けたものの、その答えなど得られるものでもなく一日一日を終えることがやつとの苦悩の日が私を絶望の苦しみの中に突き落とす中で、瞬間を繋ぎ合わせて時間の経過に身をまかせ何とか生き延びていた。書棚に並べられた多くの書籍の中には、先人達が必死で生きることの意義と目標を探し求めた末の絶望が、さながら墓碑のように並び、夜毎、枕元に立つては私に死への誘いを唆すのである。ニヒリズムや実存についての哲学書を読みふけり、脱却を図ったが全ては徒労に帰し、その失望からより深く虚無の深淵に落ち込んでいくのだった。ニヒリズムの自覚は生きることの証として捉えることも考えられようが、それはあまりにも過酷で残酷な仕業である。完全な脱却には約7年程の歳月がかかり、25歳に近くなってからのことだったと記憶している。物理学と教学に異常な興味を持ち、周囲も物理学者になることへ

の期待をよせてもらい、中学1年生頃から、大学の物理学の教授に個人として教えを受けた日々だった。しかし、ニヒリズムは、その全てを打ち砕いてしまう結末になってしまふことになってしまふのである。その深刻な辛さに耐え切れず、死を思う日々の中に何とか生を繋ぎかねばという気持ちだけは細々と続いていた。そのような状態の中で、初めて子どもが存在に気がついたのである。子どもには虚無の影も無く病んでいなかった過去の分身の姿を見た思いだった。この子ども達と一緒にいたら生きることが出来るかもしれない。

私は何の考えも考慮を払わず、気がつくとき千里第二小学校の前に立っていた。いきなり、門をくぐり、右側にあつた校長室に入り込み、「この学校で先生をしたいのですが・・・」現在では考えることも出来ない無謀極まりない行動である。このような私に対応して丁寧に話しを聞いて下さったのが校長の木岡翁吉先生であった。私にとっての最高の師であり、恩人である。私のニヒリズムの状態についての全てはお話ししなかつたが、試験だけは受けて下さいという指示を頂いて助教諭の身分でこの学校に勤めることになった。教師が不足していた当時の状況も手伝つての結果かもしれない。しかし、教師になることを希望しての就職ではさらさらない。しかし、

苦悩に喘いでいた日々は子どもと接することによって、しばし時間を忘れ、生きることが出来たと思われる。子どもにすがって自分の生を保つというようなどんでもない教師だったのである。自分の命を保つために疲れ果てるまで子どもとの生活に全てを打ち込んだ。苦悩から逃れられるし、疲れると何とか睡眠が取れるようになれるのが救いであつたが故の行動である。他の先生方からは、熱心過ぎる程、教育に情熱を持っている若い教師に映つたことだろうが、これは全くの誤解にすぎない。

このような心的状態の教師だから、学級の経営も上手くないかないことは当然のことである。四年生を担当させて頂いたのだが、自分の判断では完全な失敗である。教師を続けることは罪を重ねることになる。私は辞職願を持って校長に理由を告げ、提出したのである。木岡校長は、私の話を真剣に受け止めた上で、次のように言われた。

「よくわかりました。辞職することは自由ですし何時でも可能です。しかし、もう一回挑戦してみたらどうですか。そのためには、前任者の後を継ぐのではなく、入学して初めての一年生を担当することがよいと思いますが、どうですか。もしも、そこで失敗すれば誰のせいでもなく、あなた自身の責

も達と一緒に遊んでみようと思いついた。雨が降る日を除いて、殆どの日は自然に満ち満ちた学校の周辺を歩くことにしたのである。当時の学校を取り囲む自然は山野草に埋め尽くされた緑っぱいの丘だった。隣の教室では、教科書を中心にした授業が毎日のことになっているのだが、「こちらは、自然の中に遊びにでかけるのである」といっても単にぶらぶらと散歩に出かけるのではない。出かける際には必ず、何をするために出かけるのかという中心になるテーマを告げた上での出発なのである。描く主題を決めて写生をしたり、自然の中でもっともふさわしい歌をアコーディオンの伴奏で思いきり歌ってみたり、この季節にはどんな生きものがいるかなどを詳細に見つけ出し、観察を重ねたりの日々である。教科書を見て覚えるのではなく、自分の目でしっかりと観察し、気に入ったらメモに記録させるように導いていったのである。そのようなある日のこと。子ども達から、自分が興味を感じた生きものを飼ってもいいかと質問してきたのである。そこで、必ず観察の記録を克明に残すこと、飼った以上、その生きものが死を迎えるまで責任を持って飼うこと、途中で飼うことを放棄することには絶対許されないことなどを誓った上でしか飼ってはならないことを約束させた。多く

任になりますね。他の先生に無理をお願いして学級の人数を少し少なくしてみましよう」当時の学級は五十名から六十名位で構成され、学年は五クラス位あるのが普通であつた。他の先生方に協力を頼まれ、私の身勝手を受け入れて少ない人数で学級を構成して下さつた。現在では想像することも出来ない破格の大事件である。私にとって校長の木岡翁吉先生と、協力を惜しまず暖かく見守り育ててくださった同僚の先生方は私の生涯において、もっともすぐれて偉大な恩師なのである。さらに、木岡先生は、「貴方の考える授業を自由にやってみてほしい。もし、何か問題がおこったら私が責任をとるから」と付言されたのである。私の自由奔放な教育の試みや、何ものにも捉われず発想の赴くままの学びの捉えと展開はこの時に始まつたといつてよい。

昭和二十七年四月。初めて一年生の子とも達と対面したとき、子どものもつ集中力に圧倒されてしまった。期待と不安を秘めながらも、これから始まる学校生活と教師に対する信頼が強烈に迫ってきた。子どもに対しての責任がどれだけのものかを感じるのは恐ろしいことであつた。子どもは入学までは、一日の多くを遊びの中で過ごしてきたに違いない。そこで、いきなり教科書を見て学習を始めるよりも、まず子ど

の子ともは飼うことを望んだが、それらの条件を満たす自信がなくなつて諦めた子どもも現れた。その中で、田んぼで見かけた「たにし」をどうしても飼つてみたいというKという子どもが現れた。それもかなりの数の個体を飼つて育てると言つて決意の程を述べるのである。私はKに対し、飼う前に、どのようにして飼うのかを質問してみた。生きものにとつて、今、生息している環境条件が与えられないと、うまく育たないかもしれない危険について考えることだけを指示しておいた。全てを説明し、飼うための方法と条件をしっかり説明しそれを実行させればよいのだろうが、それは間違つている。研究とは与えられた課題を忠実に解決し答えを出すことではない。問題を見つけて自分に設定することが研究であることは子どもにも研究においても同じである。かなりの時間が経過したが、Kは「たにし」が生きていた場所の状況に出来るだけ似るような条件が何かをあらゆる面から探つた末に、「たにし」が生息していたたんぼの土や水を毎日採取して飼うことが方法として最善であることに到達したのである。耕作されておられる方に事情を説明し協力を頂いた。Kは「たにし」の生息の変化を毎日克明に記録し、報告は絶える日がなかつた。その「たにし」が子どもを産んだという

のである。Kの表情は尋常ではない。生命の誕生は、説明する言葉を見出すことさえ出来ない神秘に包まれた謎を秘めている。Kはその神秘に心奪われその瞬間を見続けたのだ。幼い子どもが持つ捉われぬ純粹極まる観察の鋭さ、集中力、持続力のどれひとつをとっても、教師や大人が考え、捉えている子どもらしさではない力を持っている。今まで考えていた子どもの捉えは「ことごとく覆され、大人が既に失ってしまった」ている、新鮮でナイーブな感受性のすばらしさと好奇心を持続し続ける能力の確かさは、子どもと教育の捉えに確かな基礎を築くきっかけとして働き、私の教育の全てを導くことになるのである。

古ぼけた校舎に使わなくなった道具類を保管しておく倉庫があった。暗くて微くささいにおいの漂う倉庫の奥深く一台の電気蓄音機が残骸のように眠って置かれているのに眼がとまった。恐らく戦前からあったものに違いない。かなり大きく立派なもので、購入時は、高価極まる代物であったと思われる。少年時代からラジオの製作や修理が楽しみだったので、これを修理して再び音を出せる状態に復活させてみたい欲望がわいてきた。担任していた一年生の教室に運びこみ中

を覗いてみると、六本の大きな真空管やトランス類が埃をかぶって鎮座している。スピーカーを見ると三〇㉟の口径を持つ、当時としては超高級品が使われているではないか。胸の高鳴りを覚えた。復活させて良い音を出してみせるぞと誓って、次の日の放課後から修理にとりかかることが始まり、日々その作業に没頭することになってしまった。長期間使わないで放置されていたこともあって殆どの部品が機能せず、復活は絶望的な状態を呈していた。幸いにも戦後ラジオが入手出来ないときに、使えなくなつて捨ててあったラジオを拾い集め、その中から使える部品を取り出して新しくラジオを作つては売るといふようなことをして家計を助けていたので、古いものだが使用に耐える部品類はゴロゴロしていた。これらの部品を使い、どうしても無い部品は日本橋の電気店をうろついて見つけてだして補うことができた。一ヶ月以上はかかったところで、やっと音が出る状態にこぎつけたのである。私も嬉しかったが、それ以上に歓声をあげたのは、最初から最後までこの作業を見続けていた子ども達である。塾など全くない時代、放課後は子どもにとつての遊びの天国である。夕方遅くまで、まんじりともせず修理の様子を見続けていた子ども達、特に男の子の興味は尋常ではなかった。複

雑極まる配線のからみを見ては、その複雑さから音が生み出される不思議さは、まさに魔法物語そのものだった。「ここで、日毎、修理を見つめていた子どもの中で、Sという、ずば抜けた観察眼と思考力を持つ子どもがいた。修理は多くの部品を接続するために、はんだ付け作業の連続が欠かせない。当然だが電気を使って加熱したはんだ鍍金を使つての作業である。「ここで私さえ気にもとめたことがないことにSが気づいたのである。はんだ鍍金は先端が銅で出来ている。これを電気を使って、はんだを溶解させ高温にしてはんだ付けをするのである。ところが、熱が加わって高温になったとき、Sがびつくりするような声を出し「先生、銅の色が変わった。何故?」そういえば、光っていた銅の色が紫のような色を経て黒く変色していくではないか。私は常日頃からそのこの不思議に疑問を抱いたことはなかった。改めてこの事象に答えるなら、銅と空气中の酸素が熱を加えることによって酸化銅という別の物質に変化することを、子どもが理解できるような言葉で説明すれば質問に答えたことになり、疑問は解決されることになるだろう。しかし、私はその秘密を説明せず、「どうして銅の色が熱せられると変わった色になるのか」「どうして即答を避けたのである。子どもがある「こと

不思議と疑問を感じたとき、その理由を簡単に説明し、教えることが教育ではないことを私は自分の過去から学んでいたのである。Sはその理由を何度も問いただそうとしたが、私はその理由を明かさなかった。それから一週間以上の日が過ぎたであろうか。私はすっかりこのことを忘れていたのだが、ある日のことSが興奮に眼を輝かせ「先生、わかった。銅と空気がくっついたのだでしょう」と言ってきたのである。この子にとつてこの現象を一週間に亘って考えに考えた末に到達した結論だったのである。「どうして空気がくっついたと考えたのか」と聞きたたすと銅のまわりにあるのは空気がないからと結論した理由を説明したのである。私は、幼い子どもが一週間のあいだ不思議を解き明かそうと考えるに考えこのような結論を見いだしたことに涙のわきあがってくる感動を抑えることができなかった。これで充分である。そこで、空気の中に酸素が含まれていてそれとくっついて酸化銅という新しい物質が誕生したのだと詳しい説明をしたのである。しかし、新しい生命の誕生にも似た新しい物質が生成される驚異。このことは、彼にとつては、更なる疑問と好奇心が無限に広がっていきつかけになったことだろう。

本題に戻らなければならぬ。息を吹き返した電気蓄音機は、当時としてはすぐれた音響を奏してくれた。修理の苦勞と期待に添えてくれる内容を持つていたのである。そこで修理に携わった者の特権として、自分の教室に置かせてもらうことを願ひ出て許され、子ども達にすぐれた音楽に触れさせる貴重な機能を果たすことになったのである。当時、LPレコードは存在せず、SP（一分間七八回転のレコード）レコードを鉄製の針でトレースするという時代である。片面五〜六分位の収録時間しかないが、高価極まるもので、容易に購入出来るものではなかった。当時、教員として薄給の身であったが、亡父が、無理をして求めたであろうレコードが家庭にあつたので持ち出し、給食の時間にBGMのように聞かせたのである。曲はカザルスの演奏するパッサカの《無伴奏組曲ハ長調》、ベートーベンの《第三交響曲》、ショパンの《前奏曲》から教曲を聴かせた記憶が残っている。子ども達には理解を得られないように思われるかもしれないが、わずか三歳で亡くなった弟が、手回しの蓄音機でショパンの《前奏曲》を繰り返して聴いていた事実から、聴くことに無理がないことは承知のことだった。子ども達は聴いていないようでも、しっかりと記憶にとどめていて放課後、何度も聴くことを迫り

れたものである。私はこの事実から子どもの鑑賞における曲の選択基準に大人と子どもの区別はいらぬということをお教えられたと思つてゐる。

この一年生を担当した翌年の昭和二十八年に千里第一小学校に音楽の専任教諭として転任することになるが、これまでに述べた一年生に音楽を聴かせたことが、私の音楽教育の研究と試みが「鑑賞教育」から始まったことにつながつたと思つてゐる。ここでは特に現代の音楽に対して鋭い反応を示し、作品に対する評価の確なことを把握の深さを実践を伴つて発表し、また、「創造的音楽作り」の先駆的な試みで物議をかもししたが、これらは現在では一般的な実践として当然な営為となつてゐる。そして、子ども達が見せてくれた鑑賞での反応は、その後、私の音楽教育を考ふる基礎となり、昭和三十三年から本格的にリコーダーを中心において教育を展開した理由と、そのための楽曲の選択基準として運動していくことになつていくのである。

このようなことがきっかけだったので、子ども達は音楽がとても好きになつてしまひ、よく合奏をして遊んだ。当時、文部省から初めて『合奏の本』が発刊され、その本から選曲

てきた源泉になつたのである。

柳生 力(やぎゆう つとむ) 先生のプロフィール
千里第二小学校、千里第一小学校教諭を経て、大阪教育大学大学院教授、神戸大学大学院教授、京都女子大学教授を歴任。(専攻：音楽教育学)



昭和27年 朝日放送での合奏

右が柳生先生 左 木島先生
(大森 翠さん提供)

し次々と挑戦し、演奏を任せることに夢中になつた。学級全員での演奏が話題となり、それを伝え聞いた朝日放送から放送したいという依頼を受け、放送局のスタジオに向いて三曲の器楽曲を演奏したときの記憶も鮮明である。当時は、録音なしの全くの生演奏の時代だったので失敗は許されない。子ども達の緊張とさまざまに集中力に圧倒されたことと、選ばれた子どもではなく学級の全員で演奏したことが何よりの喜びであつた。

振り返ると、学級全員による演奏発表の嚆矢だつたと考えられる。私ができることがきっかけとなつて、「学級が保持する学習機能」を視点にした学習についての研究と実践へのきっかけとして研究を進める契機になつたことは確かである。

字数の関係で何ひとつ言及することができなかったのは心残りだが、文学や絵画での子ども達の好奇心に根ざした探求とその結果はすばらしいものであつた。これらの全ての事象を含み、私はどれだけ多くて貴重な発見を子ども達から教えてもらったことであろうか。たつた一年間の、それも一年生という幼い子ども達の担任ではあつたが、ここで見たもの、見えたものが今に至る私の教育にかかわる全てを導き支え